



卷頭言

異常気象と基本技術

(財)日本植物調節剤研究協会 北陸支部長 種田 貞義

最近、気象報道等を見ていると観測史上第1位という言葉が頻繁に聞かれるように思われる。異常気象の多発は人間中心の無計画な乱開発に地球が怒っているような気がして仕方がない。今年もまた、夏の長雨、日照不足など不順な天候は水稲はじめ野菜、果樹等の農作物の生産に深刻な影響を与えている。これは、単に生産者だけでなく農産物の高騰など消費者にとっても大きな問題となっている。

近年、水稻では高温による、品質や食味の低下が全国的に大きな問題となっている。しかし、品質や食味の低下は気象条件だけではなく、被害をより大きくしている要因は生産の現場にもあると思われる。

近年、食味が重視され、現場ではいかに玄米たんぱく質を低く抑える栽培を行うかが重要な問題となっている。そのため、生育中後期の施肥量は限界に近いほど少なく、栄養失調的な水稻の生育となっている場合が多く見られる。その結果、高温耐性が劣るとともに、活力低下による倒伏を招き、高温や強雨と相まって、乳・心白粒や未熟粒が発生し品質・食味を落としている例も多い。

健全な稲を作ってこそ、初めて品質・食味も向上するものと思っている。

最近の食味重視の栽培は一点だけを見て基本を忘れた稲作りをしているような気がしてならない。

また、最近気懸りなことの一つは、散歩等で歩いていても水田で農家の人を見かけることが極めて稀になってきたことである。

昔から「米」という字はお百姓さんが八十八の手間暇をかけて大事に育てきた大切なものだからと教わってきた。昭和40年前半まで10アール当たり100時間を超えていた水稲生産の労働時間は農業機械や新除草剤、農薬の導入に

より、現在ではほぼ1/3の30時間前後にまで減少してきている。労働時間が少なくなり、重労働から解放されたことは非常に素晴らしいことであることに異論はない。

しかし、反面、兼業農家の増加や基幹就農者の高齢化に伴い、基本技術が疎かになってきていることも事実である。さらに米価の低迷による、農家の生産意欲の低下が基本技術を励行する上で大きな障害となっている。

作業面でも育苗、田植、除草、防除、収穫の一連の行程の中で移植時箱施用農薬、一発除草剤、一発基肥などの普及により、農家が水田へ行く機会が従来に比べ非常に少なくなってきた。水田をこまめに見て歩くことで、稲の生育状態や雑草、病・害虫の発生状況を知り、適切な管理が可能となる。また、水管理の重要性は言うまでもない。水管理による生育調節の不備は過剰生育や着粒数過多を招き、登熟不良による品質・食味低下の大きな原因となる。除草場面においても、水田に行く回数が減ったことにより、除草適期を失したり、漏水等で除草剤の効果が発揮できなかったりする場面も多くなってきたのではないかと考えている。

同じ高温条件でも基本技術をいかに励行したかで品質の差は歴然と出てくる。その基本技術の基はこまめに水田を見まわることから始まると思っている。

今後、異常気象は恒常的になり、異常が異常ではなくなることも想定される。多少のことでは負けないしっかりした基本技術で高品質・良食味米の生産を期待したい。

最後に、今回の政権交代により民主党が初めて政権与党となった。50 年来の自民党農政から、民主党農政がどのように変わるか期待を持って見守りたいものである。